



第68回（平成24年1月11日）定例会の研究発表要旨

ピザなし交流に参加して

— 「国後島のいま…」について —

稲穂 一ノ宮 博昭 氏



昨年5月12日～16日、北方四島交流事業(ピザなし交流)で、国後島を訪問して来たので、撮ってきた写真を中心に見たままをお話します。

1 渡航するまで

出航地である根室に集結したが、波が高くて先方の港に上陸できないとのことで、出航を見合わせ、日程を一日短縮することとなった。

今回、一緒に渡航した46名の人々は、北方四島の元島民と親族、北方領土返還要求運動関係者、議員、政府関係者、報道関係者、通訳など様々であるが、複数回渡航している人もいた。

2 国後島上陸

翌日、波も収まったので道の漁業監視船・北王丸(500ト)に乗船し、根室港を出航して2時間半、国後島の上陸地古釜布の港に着いた。

港の中には、以前の津波被害による沈船が多く放置されていて、接岸出来ないため、港の外に停泊した船に、日本から寄贈した『希望号』という艇(はしけ)が迎えに来た。両船の間にタラップを架けて乗り移るのだが、波が高くて大変だった。

上陸地では、日本の原発事故の後でもあり、厳重な放射能検査が行われた。その後日本から輸入された中古車に分乗して、市街地にあるムネオハウス(日本人とロシア人の友好の家)に入った。※ 鈴木宗男元議員の影響力が感じられた。

3 ロシア人宅への家庭訪問

訪問先はパン作りの職人の家で、ご主人(56歳)奥さん、6歳の子どもの3人家族でした。言葉がぜんぜん通じないので、詳しいことは判らないが、松尾芭蕉のファンのように、壁に日本語四文字の額が飾られていた。また、テーブルには鳥のから揚げやサラダなどが並らんでご馳走になった。

日本からのお土産として、文房具を子どもにプレゼントしたところ大変喜んでくれて、現地の受け入れ団体が、日本に好意的な家庭を選んだとの印象を持った。

4 現地の人との交流など

11年制の学校に行って学会会などを参観したが、小さい生徒から大きい生徒までの差が大きく、なんとなく違和感があった。最後の夜、ムネオハウスのレストランで、現地の人たちとの交流会が行われたが、日本人向けの米食や魚料理が並び、お互いにロシア民謡などを唄って交歓した。

また、日本人墓地に墓参してお経をあげたり、西海岸から知床半島を見渡したりしたが、驚いたことに持っていた携帯電話が、日本の友人にはつきり繋がった。

島の中央にある羅臼山の方には、温泉があるとのことだが軍事施設があるため、日本人は行けなかった。

帰路、有り金をはたいてウオッカとキングサーモンの缶詰を土産に買ったが、チョコレートが量り売りだったので驚いて帰った。

(文責：鈴木清士)

次回の予定

次回(3月14日)は、北海道地質調査事業協会技術アドバイザー 若松幹雄氏の講演「手稲地域の土地の成因と防災について」を予定しております。

後半の時間では、平成23年度の活動成果等を振り返りたいと思います。

会場は、視聴覚室です。

第5回歴史年表 学習会資料より

資料提供：茂内義雄氏

大正9年(1920)3月12日 尼港事件

日本歴史大辞典：河出書房

ロシア革命干渉のためシベリアに出兵し、黒竜江口のニコライエフスク(尼港)を占領していた日本軍は、大正9年2月28日バルチザンに包囲されて降伏した。3月11日降伏協定を破って奇襲反撃に出た日本軍は破れ、隊長・領事らは全滅し、残兵と居留民122名は捕虜となった。その後、日本援軍の来襲を知ったバルチザンは5月25日市中を焼き払い、日本人捕虜を殺し撤退した。日本政府は国民の反ソ感情をあおり賠償を要求し、この事件を北サハリン占領の口実にしたが、結局要求を撤回した。

〔註〕これに関連して、江連力一郎に関わる新聞記事も多数紹介されましたが、紙幅の都合上割愛しました。

一中の兎狩り

北海タイムス：大正9年9月19日

札幌第一中学校では山田校長が総司令官堀野教頭が副司令官となり以下夫々の物々しい名称付けて隊を組織之が実際の指揮は小原大尉が当たり一昨日午前4時から秋季遠足を兼ねて軽川停車場北方に兎狩りを催したさうして攻立て、捕った兎を数へて見ると実に35匹の大成績で翌日午後2時半頃帰校したが午後3時過から職員生徒一同は同校の一堂に会し其兎汁に舌鼓を打って解散した

手稲開村50年式 昨日下午手稲校にて挙行

北海タイムス：大正10年9月4日

既報、札幌郡手稲村にては昨3日の佳日を卜して同村開村50年記念祝賀会を開催せしが先ず午前9時に手稲神社に**奉告祭**を行ひ厳肅裡に終了し直に下手稲小学校に於いて祝賀式を挙行し同村各小学校児童数百人、各小学校長及び訓導、村会議員並びに来賓として藤井札幌支庁長代理、近藤造林専務、瀬田大尉、中野前田農場支配人、竹内静勝氏、袴田樽新本田タイムス記者等着席中崎村長開会を宣し『君が代』の合唱、村長の式辞朗読ありて次で同村開拓の

功労者を表彰すその氏名左註の如し〔註：原文記事は縦書き〕

▲甲之部(木盃1組)北海道造林合資会社、前田農場、日本石油株式会社軽川製油所、極東煉乳株式会社、故佐々木清、佐藤文平、故國領重吉、舟木與八、故小島尚友、近藤新太郎、竹内氏静勝、川中長三郎、及川専治、松井スエ子

▲乙之部(木盃1個)故細越龍之助、故伊藤太次兵衛、故村上藤吉、故宮崎惣右エ門、故芹野藤三郎、加藤留吉、故中田儀右エ門、故三木勉、同福玉仙吉、宮城和一、千葉市右エ門、石井捨太郎、安井茂右エ門、川上久作、丸子惣吉、柳原國太郎、池田七藏、岡本島次郎、三上栄一、宮崎源治右エ門、生田春正、國本榎太郎、村上貞植、柏原龍植、池田岩太郎、志賀兼治、上野總次郎、高田直一郎、伊藤信正、奥田良平、故管野格、漆崎ふさの子、清田とい子、本間農場

▲丙之部(表彰状のみ)久守五作、佐々木熊吉、和田藤根吉、故羽田野貞太郎、藤若林吉太郎、故本間傳四郎、義原政治、藤山幸一、徳永源吉、徳永守一郎、佐橋義男、岡本菊松

次いで札幌支庁長代理、桑原下手稲校長等の祝詞、近藤被表彰者総代の答辞ありて正午閉会を告ぐ閉会后一同

同校庭に於いて記念の撮影をなし直に別室に設けられたる宴会に臨む開宴に先ちて中崎村長挨拶をなし次いで同氏の発声にて皇太子殿下及手稲村の万歳を三唱し午後1時盛會裡に散会せり尚午後よりは神社境内に於て余興として芝居あり夜間は軍人分会、青年会及び学校の合同の盛んなる提灯行列ありて同村近來稀有に見る殷賑を極めたり

可愛らしい狐 手稲養狐場出品

— 日本で養狐の出品は之が始めて —

北海タイムス：大正15年8月6日

第一会場の呼物手稲養狐場は第1道産館の裏に30坪程の金網を張って銀黒狐4頭の小狐が嬉々として戯れてゐる様は大人が見ても子供が見ても「あゝ可愛らしい」といふので朝夕黒山の人だかりだ。之が道産否国産として発展するならば大した産物である1頭千円以上の品物が出品されてゐることゝて狐皮の値を知る外国婦人などは1時間も此処に足を止めて眺めてゐる。又博覽会に養狐の生きものを出品したのは之を以て嚙矢とするが畜産界に漸く養狐事業がやかましくなつた今日此手稲養狐場の出品は正に当を得たものである